



「良い子 悪い子 普通の子」を分けるもの ～だれでも「運のいい人」になれるヒント～

日本海テレビに桑原秀和さんという異色の経歴をもったアナウンサーがいらっしゃることをご存じでしょうか。

桑原アナは、2005年、萩本欽一さん（欽ちゃん）が創設した社会人硬式野球クラブチーム「茨木ゴールデンゴールズ」（欽ちゃん球団）のメンバーだったのです。

桑原選手は、野球が抜群に上手であったわけではなかったようです。むしろ要領が悪く、練習してもなかなか上達せず、3年間1度も公式戦出場を果たすことはできませんでした。萩本欽一さんから退団を宣告された際も、「はい、僕はダメですからやめます。」とあっさり承諾してしまうのです。

そんな彼を、やめさせなかった人がいます。

それは、地元のおばちゃんたちからの「野球はへたかもしれないが、彼はチームの中で一番真面目に練習をしてきている。そんないい子を絶対やめさせたらだめ。」という多くの嘆願だったと言います。

桑原選手は、欽ちゃんからのアドバイスにより、バント練習の特訓に取り組み、公式戦において絶妙のバントで大活躍。その後、退団して念願だったアナウンサーに採用されます。その面接で語ったのが、バントのコツ誕生秘話「スー・ポン物語」。桑原アナが現在も大切にしている宝物は、「欽ちゃんからの言葉で、「運をためる」…辛いことや苦しいことを経験したり、地道な努力をしたりすると運がたまる。それを使うときがくる。」と日本海テレビホームページにも紹介されています。

地道に努力すること、苦しい境遇に愚痴をこぼさずただひたすら耐えること。どん底にいる時や失敗した時にこそ運はたまる。萩本欽一さんの著書『ダメなときほど運はたまる』には、日本一のコメディアンとして、視聴率「100%男」の異名をとったほどの人気スターであるにも関わらず、貧しさ・悔しさ・辛い下積みの時代が綴られています。そんな人生の「ダメなとき」の中で、コツコツと「運をためてきた」結果が、成功の原因だと振り返っています。今の子どもたちには、このような苦しみ・悔しい時を乗り越えたり、前向きに考えたりする度量があるでしょうか。私たち大人にはどうでしょうか。

萩本さんのいう「運をためる」という言葉の中には、人間としてよりよく生きることにつながる大切なキーワードがいくつもあります。

荘原の子ども一人ひとりが「運をためていく」ためには、どんな体験が必要でしょうか。学校や家庭生活の中で、ちいさな「失敗」や「挫折」を繰り返していくことも必要です。相田みつをさんも、『いのちの根』の中で同じことを語っています。

なみだをこらえて かなしみにたえるとき
ぐちをいわずに くるしみにたえるとき
いいわけをしないで だまって批判にたえるとき
いかりをおさえて じっと屈辱にたえるとき
あなたの眼のいろが ぶかくなり
いのちの根が ぶかくなる

『いのちの根』 相田みつを作



